領域 12 インフォーマルミーティング議事録

日時：2024 年 9月17日（火）12:00-13:00
場所：北海道大学 E302 会場
司会：栗田玲
書記：近藤徹

＜報告事項・承認事項＞

1. 領域運営体制の確認

以下の通り確認があった。

代表：栗田玲（都立大）　任期 2024 年 4月-2025 年 3月
副代表：山口毅（名大）　任期 2024 年 4月-2025 年 3月
次期領域副代表：藤﨑弘士（日本医科大学）　2024 年 4月-2025 年 3月

任期 ソフトマター 化学物理 生物物理
2023 年 10月-2024 年 9月 小林史明(九州大) 近藤徹(東工大) 多羅間充輔（九州大）
2024 年 4月-2025 年 3月 堀川裕加(山口大) 水口朋子（京都工繊大）大窪健児(総研研)
2024 年 10月-2025 年 9月 横田宏（都立大）森義治（慶應大）江端宏之（九大）

2. 次期領域副代表について

以下の案が承認された。

野口博司（東京大学）
任期 2025 年 4月-2026 年 3月

3. 次期領域運営について

以下の案が承認された。

ソフトマター：武中能子（産総研）
化学物理：末松安由美（西日本工業大）
生物物理：井上雅世（九工大）
任期はいずれも 2025 年 4月-2026 年 3月

4. シンポジウムの提案

領域 11 との共催シンポジウム（主領域は領域 11）について報告された。JST さきがけ「複雑な流動・輸送現象の解明・予測・制御に向けた新しい流体科学」領域をベースとするシンポジウムである点についても報告された。以上 1 件のみだったので、引き続き積極的な提案を歓迎する旨案内があった。

5. 招待講演などの提案

特に議題はなかった。

6. 計算物理領域 WG の報告

以下の点について説明がなされた。
・過去の資料が物理学会のマイページより確認できる。
・計算領域で申し込む場合、第２領域も選択する。例えば、第２領域として領域１２を選ぶと、領域１２の講演数に反映される。

計算物理準備会の岡本先生より、以下の追加説明がなされた。
・予定では来年（2025）の秋から施行し、３年の猶予期間を経る。その間に毎年１００件程度の講演があることが望ましい。
・発表登録時に第１領域と第２領域を選択でき、計算領域と領域１２を選択すると両方にカウントされる。
・学会ＨＰのマイページの会員コンテンツに、“新領域施行について”という記事がある。
・３つの合同セッションテーマについて

当該議題について、以下の質問が出された。
・　（質問）第１領域と第２領域で選ぶことに重みの違いはあるのか？
　（回答）両方とも講演数は１つとしてカウントされる。ただ、第１領域でセッションが組まれるので注意。

7. 若手奨励賞の報告と規定変更について

審査委員長の山口先生より以下の報告がされた。
・６名の応募があり、審査委員９名で審査、候補者３名を選出した。
・学位取得１０年以内を満たす候補者１名を C.N.Yang 賞に推薦することにした。

若手奨励賞授賞規定および細則の改訂について、以下の通り報告がなされた。
・英語で応募できるようにしたいとの希望があった。
・若手奨励賞の英語ページを作成する必要がある。
・英語での応募を認める場合は、応募書類の指定を変更する必要がある。
・候補者資格について、年齢制限緩和規定の記載を変更する旨の説明があった。
・審査の基準について、領域 12 の活性化につながるように新たな文言が追加される旨の説明があった。
・応募方法・申請書の様式について、書類は日本語または英語で作成できること、英語の場合の推薦書類の文字数制限、研究題目は英語のみでも可能であること、が明記されると説明がなされた。

＜審議事項＞

8. 講演概要の英語化について

・概要くらいは英語化してほしいとの希望がある旨、説明があった。
・対応案として以下の２つが説明された。
　１）英語１ページ、２）日本語１ページと英語１ページの両方
・英語化による利点として、DOI がつく点、そのために引用される可能性が増す点、などが説明された。

当該議題について、以下のような賛成および反対の意見が出された。
反対意見
・ChatGPT などに投げられるだけではないのか。

・日本語だけでいいのではないか。理由は、日本語の概要のクオリティ確保だけでも大変。さらに、プレリミナリーデータを示す場合もあるので英語化すると情報が拡散する危険性がある。
・DOI がつくのは怖い。不特定多数に見られてしまう可能性がある。
・英語化を強制するのはいかがなものか。日本語を禁止にするのは良くない。英語を推奨程度にするのが良いのではないか。
・過去の英語化は失敗。英語化すると討論が盛り上がらない。大学院生などの学生にとっては壁が大きい。

賛成意見
・概要どころか発表自体も英語化しないと学生の英語力が向上しない。海外や日本にいる外国人研究者の参加を促す効果もあるのではないか。少なくともプレゼン資料は英語化した方がいい。英語化は国際競争力強化につながる。生物物理学会の発表は英語化しており、上手くいっている。

9. 学生優秀賞の規定の変更について

以下の内容が確認された。
1）現状では応募者数が多すぎる。
2）失格者が多すぎる。募集資格が上手く伝わってない可能性がある。
3）審査員が散らばっているなど、公平性が保てない
4）プログラム編成に影響が出る。

対応策として、以下が提案された。詳細は春のインフォーマルミーティングで決める旨案内された。
2）について
・応募時に申請内容をすべて提出してもらう。
3～5）について
・審査委員の数を減らすため、同一セッションで審査する。
・ポスター発表のみに限定する。
1）について
・過去の領域１２での発表回数を条件に入れて制限する。
・条件はつけず、一次審査を行う。一次審査で過去の発表回数が多い方を有利とする。
・条件を設けない。ポスター発表限定なら条件は必要ない。

上記提案に関して、以下の意見が出された。
・一次審査を追加すると、発表登録締切が早めないといけなくなるのではないか。
・同一セッションにすると審査員数を減らせるし、学生にとってもライバルを知る良い機会となる。
・発表回数の制限が無難なのではないか。
・同一セッションとするなら、3分野ごとにまとめてはどうか。各セッションに人数が集まるのであれば、それも可能。前半は審査セッションとしたりするなど、一般セッションと審査セッションを混合させることも可能。
・折衷案として、発表回数で緩く制限しつつ、それらを同一セッションで審査する、でもよい。
・発表回数制限を２回にすると縛りが緩いが、３回以上にするとＭ２の学振申請までに応募できない可能性がある。
・ポスター発表を活性化するためにポスターセッションで学生賞を出しても良いかもしれない。ただ、そうすると、口頭発表の数が減ってしまう可能性がある。

・口頭発表で審査する方がちゃんと審査はできるのではないか。
・発表賞に応募できる回数に上限を設けてはどうか。ただ、この場合は、各学生が応募してきた回数を記録して引き継いでいく必要があり難しいかもしれない。
・ポスター賞と口頭発表賞では、口頭発表賞の方が学生にとっては価値が高いので、口頭発表賞は残すべき。

上記意見交換の後、ポスター賞と口頭発表賞のどちらとするかについてミーティング参加者で決を採った結果、口頭発表賞のみに限定することが決定された。
また、応募者は同一セッションに固める方針で進めていくこと、人数をどう絞るかについては今後意見をまとめていくことが確認された。
2025 年の 3 月には承認、 9 月から新制度に移行することを目指す旨、案内された。

10. その他（キーワード変更希望があれば）

現状のガラス領域のセッションは領域 6 と合同になるが、実際は領域１２での発表になってしまうため、今後領域 6 と詰めていくとの報告がなされた。